

宗門大学に於ける

佛教研究の在り方に就いて

藤 原 了 然

(一)

佛教の各宗が、多大の犠牲を拂つて、それぞれ宗門の大学を經營していることは、その内容とはとにかく、世界にもその比を見ない偉觀と稱してよいであらう。そのスケールは別にして、宗門の大学である以上、いわゆる宗乘、餘乘が、その学校の研究の中心的なものとされるのもまた當然であらう。従つて、学制改革以前と、学制改革以後の今日とは、その比重は大いに變つてゐるにもせよ、研學、卒業のコースには、必ず卒業論文と云うものが存在する。この卒業論文なるものを、履修單位の數課目の複合体式なものと見るが、四ヶ年間の研學の総まとめ的な意義を持たせるかについては異論がある。しかし、卒業論文なるものは、その氣分としては、自己の好むところのテーマを採り上げ、他の必須課目の何倍かの單位として取り扱われている以上、なんらかの意味に於て、四ヶ年間の研學の基盤の上に打ち立てられたところの勞作と考えるのがふさわしいようである。

こうなると、卒業論文なるものは、過去の研學の総まとめであると共に、また將來の研究に

對しても、或は社会的活動についても、重要な意味をもつものといわなければならない。この卒業論文の製作に當つて、誤つて、安易なテーマを選んだり、いわゆる要領のよい索引き戦法で、研究を糊塗するというのが如きは、よしあしというような性質のものではなく、自己の学問的良心を傷けるものと謂わねばならない。

(二)

又凡そ研究なるものは一面に於て、よき成果を期待するならば、その研究法も最善の方法に依らなければならないことは勿論である。テーマの取上げ方、資料の選考整理、構想の正鵠というようなことは、いやしくも、研究論文と名のつくものであれば、常識的に考慮さるべきことである。勿論こゝはいろいろものゝ、限られた期間と、経験の乏しい学生諸君にとつて、このことは、そう容易なことではないであらう。毎年のように拜見する何部かの卒業論文に接するごとにこのことが痛感される。齒に衣を着せない云い方をすれば、止むを得ず、何かなしに、或はせつばつまったと言つような追込まれた立場から書かれたのではないか思われるものも決して絶無ではないといえようか。

尤も論文などというものは、暇があつて仕方がないというような環境に於ては出来るものではないことも事實である。逆にいえば、忙しから筆が運ぶとも考えられる。只、のぞましいことは、正しい方法と確かな資料、透徹した思弁によつて、有意義な論が物されるのでなければ、それは精力の消耗と時間の浪費を出でないことが銘記さるべきである。

一口に佛教の研究とはいふものゝ、時代や個性の相違によつてまちまちであることは、今更
 いふまでもないところであらう。訓詁、註訳といふことが佛教學の全部であつた時代もあるし、
 批判、思弁といふことが重要視される場合もあるわけである。しかし、佛教研究といふことが、
 研究のための研究といふか、尸史的事實の究明とか、哲學的立場から佛教思想や佛教々理を批
 判検討するといふことのみに終始するようなことになるか、それはそれで意味のあることでは
 あるが、宗門大學に於ける佛教研究が、全部かくの如きものであつていゝかどうかといふこ
 とについて餘程反省を要するものがあるのではなからうか。

何にも、かつての時代のように、宗門内に於ける宗餘乘の研究なるものが、徹頭徹尾、いわ
 ゆる御用的研究であれといふのではない。ただ宗門大學に藉をおく學生諸君の多くが、將來に
 於て宗門の中堅として、宗門の發展に努力するといふ理念に燃え、又、世間からその期待を持
 たれてゐるとするならば、宗門大學に於ける學問研究といふものは、このことゝ無關係であつ
 てはならないはずである。もとより、宗門大學の學生諸君にしたところ、その將來はまちま
 ちであらう。一部の人は、學問一途に進む人もあらうが、多くの人は、いわゆる寺門聖營に邁
 進する人々である。

この中、寺門聖營に於ても、自行と化他の両面が重要であることは、いふまでもないところ
 であるが、この自行にしても化他にしても、矢張り、その據り所となる理論と、これが實現に
 際しての實踐方法との両面に於て正しさが確保されなければならぬであらう。そして、この

ことに対する基礎的なそして理論的なものが、宗門大学に於ける研學の眼目であり、又宗門大學経営の趣旨でもあるはずである。

(四)

アブハチ取らずという言葉がある。純學問的でもないし、といつても立派な実践派でもないというようなことが起りかねないのである。端的にいうならば、學門の世界に於て、研究などという言葉は、そう乱用せるべきものではない。前人未踏の世界の開拓とまでは行かないにしても、何か新しい組織化とか、或は新しい見解の披瀝とか、特別な問題の提出とかいう要素の何れかが含まれてゐるものでなければ、研究という言葉は當らないともいえるであらう。

難解らしきテクニカルタームを並べたてゐるのみが學問ではないことはいうまでもないが、學問の一途をすゝむにしても、教化のオ一線に突きすゝむにしても、今日の宗門大学の佛教研究というものは再考を要する点が少くないのではなからうか。率直にいうならば、現在の宗門大學の學問が、本當に地についてゐるかどうかということについて再省三思を要するのではあるまいか。